

■「電電ありの実会」とは

吾妻山の真下の福島市土船に、青葉学園という養護施設があります。青葉学園は、児童は家庭的な環境の中で養育されるべきであるという創立当初の理念を継承し、入所児童の養護と自立支援を目的とする児童養護施設で、幼児から18歳までの約60名が生活しています。

昭和21年、戦災孤児の収容施設として茂庭村(当時)に創設され、現在地には昭和28年に移転しました。当時は、加入区域外のためなかなか電話が付かず、子供達が急病の時など本当に困っていましたが、昭和36年2月16日に待望の電話が開通しました。開通工事は、福島電報電話局(当時)の職員の手で行われ、吾妻おろしの猛吹雪の中、23本の建柱工程を僅か3日間で完成しました。長い間待っていた電話なので、工事中は年上の園児も何かと電話局職員に気をつかうなど、微笑ましい交歓がありました。これがきっかけで電話開通の記念に学園に日用品・衣類を贈ったのが青葉学園園児との付き合いの始まりです。

5月節句に鯉のぼりを贈り、クリスマスにはプレゼントを贈るなどしているうちに、これを善意の会として組織することとなり、昭和37年10月の電電記念日に当時の水尾安彦通信局長から善行表彰されたのを機会に「電電ありの実会」が結成されました。

「ありの実」とは“梨の実”のことで、青葉学園は福島名産の梨畑に囲まれ、秋には甘い香りがして、ほのぼのとした愛情につつまれているような環境にあることから、この名前を付けたとされています。結成当時の会員は415名でした。

昭和38年6月、青葉学園の創立記念日に会員はじめ局内の絵画サークル「画楽多クラブ」や関係者の働きかけによって、貨車兼用の自動車「たんぽぽ号」を贈呈しました。全国からも、種々の形で厚意が寄せられたと記録(当時の新聞、テレビ、ラジオで大々的に報道された)に残されています。

平成18年9月16日の青葉学園創立60周年記念式典で、青葉学園より感謝状をいただくとともに、平成19年11月6日、第9回福島市社会福祉大会で会長より表彰状を授与されています。

「電電ありの実会」は、先輩の意志を受け継いで着実に現在まで歩み続けてきています。年間を通して定期的に慰問・激励・贈り物を行っています。現在の会員数は約500名で、先輩の灯した善意の灯を絶やすことなく、自然に広がる形で、発展させていきたいと願っています。

平成23年12月